

DBS - 19 - 05

日本独自のリーダーシップ養成法を求めて  
～播磨陰陽師の語りとマインドフルネスからの考察

飯塚 まり  
(著者)

2019年5月

(要約)

日本独自の知恵や practice で、現代のリーダーシップ教育への応用の可能性を探るために、播磨陰陽師の知恵や practice について分析を加えた。陰陽師は、官僚としての陰陽師と、在野の陰陽師に二分される。在野の陰陽師の中では、播磨文化圏が陰陽道を極めるのに適していたため、播磨陰陽師が突出して有名である。その末裔であり、現存の播磨陰陽師へのインタビューをもとに、特徴を（１）集合的無意識の意識的利用、（２）光と影を作らない（宗教を作らない、助けない、頑張らない）、（３）現代性（地球環境と、ビッグデータとクラウドを駆使するインターネット社会への示唆）の三点から論じた。また、流行しているマインドフルネスとの関連についての考察を行った。そこから得られる知見は、インターネットやビッグデータによって、私たちの集合的無意識が可視化され、クラウドを通じて共有化され、近縁の距離なくつながってコミュニティをつくりやすくなった時代だからこそ、また、マインドフルネスが流行り、地球環境問題が待ったなしの時代だからこそ、彼らの伝えてきた知恵や技法が、今後の日本人や人類の文明の進化を考えるうえで、大きな意味がある。

- ・著者の許可なく、本ディスカッション・ペーパーからの転載、引用を禁じます。
- ・DBS ディスカッション・ペーパー・シリーズは、オムロン基金により運営されています。

日本独自のリーダーシップ養成法を求めて  
～播磨陰陽師の語りとマインドフルネスからの考察<sup>1</sup>

Searching for Japanese Specific Method for Leadership Development:  
Narrative of “Harima Onmyoji” and Mindfulness

飯塚 まり (Mari Iizuka)<sup>2</sup>  
同志社大学大学院ビジネス研究科

## 1. はじめに

マインドフルネスが世界でも日本でも流行中である。筆者の専門とする、経営学、組織論の中では、マインドフルネスは、リーダーシップ養成の分野で取り上げられることも多い。マインドフルネスの源には、禅も影響を深く与えている。そう考えると、少なくとも経営学においては、以前から日本の近代化以前にあった知恵や practice で、非近代的だと私たちがとりあげてこなかったものが、欧米の「使えるものは使う」というプラグマティズムの洗礼を受けて、今度はマインドフルネスとして日本に逆流する現象が起こっているといえる(飯塚 2018)。これはリーダーシップ養成教育でも、同じことが言えるのではないか。

そうすると、マインドフルネス(おおまかに言うと禅瞑想)以外にも、日本に存在していた知恵や practice で、私たちが忘れてしまっているものがあるのではないか。そこには、マインドフルネスの例に見られるように、世界が求めているような「使える」知恵や practice があるのに、日本人が見過ごしてしまっているものもあるのではないか。もしそういうものがあるのであれば、それを掘り起こし、分析を加えて世に提供することは、日本人にとっても、また、日本からの発信としても、大きな意味を持つだろう。本稿は、そういう問題意識から始まっている。

## 2. 播磨陰陽師

日本独自の知恵や practice で、現代のリーダーシップ教育への応用の可能性を持つという観点からは、色々なものがあげられよう。例えば、昔、京都の旦那衆の多くが嗜んだという、茶道や能楽は、その代表的なものかもしれない。

今回は、その可能性を持つものとして、播磨陰陽師の知恵や practice について取り上げる。陰陽師というと、小説や映画になったフィクションとしての安倍晴明が有名だが、本稿でとりあげるのは、もちろんフィクションの中の陰陽師ではない。非常に粗い分類では

---

<sup>1</sup> 本論文は、『統合人間学研究』第2号(2019)への掲載が決定している。

<sup>2</sup> 連絡先(e-mail) [miizuka@mail.doshisha.ac.jp](mailto:miizuka@mail.doshisha.ac.jp)

あるが、陰陽師は、安倍晴明に代表されるように天皇に仕え暦を管理していた官僚としての陰陽師と、在野の陰陽師に二分される。そしてどの時代を取り上げるかにもよるのだが、在野の陰陽師は、占いなどを行うとともに、茶道や能楽など様々な文化に影響を与えてきた。文献によると、時代が下がるにつれ、官僚としての地位の安定していた宮廷陰陽師に比べて、在野では、陰陽師間やその他の職業との競争があったがために、実力のある陰陽師が多く排出されるようになった。(稲田 2003 年、武光 2010 年、山下 2010 年、斎藤 2014 年)

在野の陰陽師の中では、播磨の国の陰陽師が突出して有名である。その理由としては、播磨文化圏が陰陽道を極めるのに適していたということがある。その要素の一つには、降雨が少なく気候が穏やかなことから星空がよく見え天文観測に適しており、現在でも天文台の多く存在するような、占いがしやすかった土地であったことがある。また、二つ目としては、交通の要所で、瀬戸内の海路、北には出雲に続く陸路、東には畿内へと続く陸路があつて、渡来人と大陸文化が流入しやすい場所でもあつた。いわば最新知識の集約しやすい場所であったのだ。加えて、土地が肥えていて鉄や塩が取れ、石や革の産地でもあつたため、経済的にも豊かな土地であった。このような理由で、播磨文化圏は陰陽師の里と言われており、歴史の中でも有名な陰陽師が多く排出され、また、安倍晴明を含めて、様々な陰陽師のゆかりの場所も現存している。(播磨学研究所 2006 年、高平 2007 年、尾畑 2010 年)

さて、筆者は、現存する播磨陰陽師である尾畑雁多氏へインタビューする機会を得た。そのインタビューの一部は、「播磨陰陽師のインタビューノート：個人、社会、地球環境まで含めたウェルビーイング考察の参考として」(飯塚・佐藤・中川 2019 年)にまとめられている。一緒にインタビューを行った佐藤は臨床心理学を、中川はホリスティック教育を専門としている。また、日本の NLP (Neuro Linguistic Programming, 神経言語プログラミング) の草分けである金蔵院葉子氏が、同席した。

インタビューの内容は、尾畑氏の言葉を借りれば「怪しそうな職業だけれど怪しくない」ものであつた。播磨陰陽師をどう位置付け、また、語られていることをどう検証していくのかは、今後の課題である。ただ、話を聞く限りでは、日本の歴史の中で、非常に高度な心理学的な技術が磨かれ、それが播磨陰陽師の家系に一子相伝という形で伝わっており、その播磨陰陽師の知恵や技術をしっかりと分析・考察をすることは、心理学(佐藤)、ホリスティック教育(中川)、経営学(飯塚)の各々の領域で示唆に富むものになると感じさせた。

そこで、本稿では、播磨陰陽師、尾畑雁多氏の語りをもとに、リーダーシップ養成に係ると思われるものについての、考察を進める。また、現在、流行っているマインドフルネスに関する **practice** についても述べ、播磨陰陽師の知恵や **practice** との関連を考察する。

### 3. 播磨陰陽師の語り

尾畑雁多氏へのインタビューは、2017年3月13日に、京都の同志社大学の会議室にて、約2時間にわたって行われた。また、飯塚は2017年2月に、金蔵院葉子氏の紹介で、尾畑氏に会い、約1.5時間の予備面接を行っている。以下は、彼の語ったことの抜粋である。

陰陽師が現存することはあまり知られていない。それは、今、代々受け継いだ家業として陰陽道をしている人がほとんどいないからで、陰陽師は明治時代に神道の一部になったものもいるが、多くは追討令が出たため消えてしまった。

現存する陰陽師は40~50人残っているが、活動しているのは10人くらいで、生業としてはセミナー業をしている者が多い。陰陽師には、ランクがあり、上層部は、血筋の上に霊能力が必要で10人くらいしかいない。

播磨国は陰陽師のふるさとで、陰陽道の中心である。播磨陰陽師は、播磨の国で、主に軍師としての役割を担ってきた。そこで培われてきた知恵や **practice** は、とにかく実戦のためのものであり、結果がすべてである。もし戦いに勝てないと、陰陽師（一族）としての実力が問われて、首になってしまうからである。しかし、播磨陰陽師は軍学が得意であったので、明治になって、明治政府に敵するのではないかと恐れられて、極寒の北海道の地へと追放された。

一族の中で、陰陽師として選ばれるのは、生まれつき霊能力のあるものだが、その人が亡くなってしまうこともあるので、念のために後継者以外のバックアップも準備される。尾畑氏は、バックアップであったが、正式な後継者が亡くなってしまったので、播磨陰陽師を継ぎ活動している。陰陽師としての適正は、小さいときに霊能力の「おしるし」によって判断される。尾畑氏の場合、夢の世界に属するといわれる多くのネコたちが、なぜかいつでも寄ってきたりした。陰陽師になる者は、霊能力に関して、15歳くらいにまでに、一般の霊能者が体験するすべての物事を体験しなければならないとされており、幽霊を見たり、神隠しにあったり、猫がついてきたり、などが現象として起こる。

播磨陰陽師になるための勉強法としては、三種の神器（鏡、刀、勾玉）になぞらえた、3つの柱がある。鏡は神事で、祝詞、儀礼や日本書紀の勉強など。刀は武術や六韜三略や孫子の兵法の勉強。勾玉は、霊術で、幽霊とか狐憑きとかの見分け方や対処の仕方であり、夢判断も入る。

播磨陰陽師は一族の中の一人がなり、一子相伝の世界である。よって、陰陽師の知っておくべきことが今まで外部に出されることはなかった。しかし、陰陽師の中には、厄年の41歳までに自分の伝承者を見つけられない場合は、陰陽師としての業務情報を世間に広めるという掟がある。尾畑氏のケースはそれにあたるので、厄年以後に陰陽師としてカムینگアウトした。

陰陽師に関する教えは、自分の後継者がいなくても、然るべきときに然るべき人が出てきて、その人が夢の中で学んでいくと考えている。尾畑氏の場合は、陰陽師であった祖母にも直接に教えられたが、それ以外に、夢の中に教える人が出てきて、これを読めとかあれを読めとか指示がきて、そこを読むと答えが書いて有るといふことの連続であった。

陰陽師は、陰陽師としての仕事以外に、その時代の最先端の色々なものを取り入れるというのが決まりであり、仕事もその時代の最先端のことを生業とすることになっている。尾畑氏は、コンピューターゲームの創成期に、シリコンバレーで、ゲームのクリエイターをしていた。

夢の中では、1割ぐらいが象徴的な夢であり、それを解釈する。象徴的かどうかの判断では、何度も同じ夢を見たり、ある一定の内容の夢を見たりがある。特に、(軍師としての)陰陽師が気にするのは、一人の夢ではなく、同じような夢を見た人が3人現れたら、これには意味があると考え。この3人が同じ怖い夢を見れば、世の中がおかしくなっていて不安な状態があるからそういう夢を見ると判断する。そして、必要な場合には介入を行うのだが、夢を見た人達に「これはいい夢なんですよ」と言い、そのことによって、集団の夢の解釈が変わり、それによって世の中そのものが変わっていくと考える。夢の解釈を操作することで、現実を変えていく。これは、戦国時代の士気を管理するための軍事テクノロジーである。

集合的潜在意識に対して、操作するためには、それにアクセスしながらも飲み込まれないようなトレーニングが必要になってくる。それは、武術で行い、播磨御式神内(はりまこしきうち)というものをしている。武術を使って、身体のコントロール、メンタルのコントロール、そして戦略のコントロールを行う。戦略のコントロールは、知恵を尽くし、できる限り体力を使わないで勝つような心理戦を構築する。

武術は、要は(ネガティブな思いなどの)殺気のコントロールで、気持ちを楽にして殺気をうまく逃していくことが肝要である。例えば無駄に怒ったり泣いたりせず、必要なときに怒りを出し、不要なときはじっとしているようにコントロールする。脳も肉体の一部なので、肉体を鍛えることが肝要である。武術は、どちらかと言うと瞑想に近く、動く瞑想みたいな感じである。もし3人が刀で斬りかかってきたら、思考していたら斬られてしまうので、無意識の状態になって、風が吹いたらそれに対応するように捌くと斬られない。

ポジティブなものに関しては、それはもともとがポジティブで、ポジティブ性は勝手に出てくると考えている。西洋のように「目標に向かって頑張る」とは考えない。もし目標を阻害するものがあればそれを除去すれば、勝手にポジティブになると考える。

藩の軍隊といっても、戦争をするときに頼る兵士は、臨時雇いをした農民が主で、その人たちはすぐくネガティブだったり、酒を飲んで酔っ払っていたりして、軍隊としては弱い。なので、軍師はそのネガティブさを取り除き、強い軍隊を作って、勝つように誘導する。そのために、臨時雇いの農民と一緒に酒を飲んで騒いで仲良くなり、鼓舞することを

言う。仲良くなったら皆が戦ってくれる。または、夢の解釈を変えて、「首をはねる夢を見ただろうが、それは、自分の首ではなくて、相手の大将の首だから、今度の戦いは勝つ」と言って農民たちの潜在意識を安心させる。そうしておけば、自然はどんなことがあっても頑張らないので、流れのまま頑張らないで勝つ。頑張る必要はない。

幽霊や貧乏神を見たら、祓う。成仏はさせず、他のところへ行けば違う現象を起こすので、組み合わせがまずいのであって、それ自体が悪いわけではないから、ちょっとよけてくださいと丁寧に頼むのが、祓うことである。また、人は生きてると悪口を考えるなど、いろいろな罪や穢れが溜まり、それが不幸な出来事になるので、それが起きないように穢れを減らす。祝詞を使うのは、あれは昔からある良い言葉の集まりなので、その振動を当てて、強制的に頭の中の悪い言葉をどこかへやってしまう。祝詞の日本語は、人間の一番コアな部分に記憶されている言葉なので、わかってもわからなくても、その振動そのものが効く。ただし振動なので祝詞をあげる人の能力による。

穢れは「気が枯れる」ということであり、祓ってみたり温泉に行ってみたり、皆で笑ってみたりして治す。節句のところでリセットするのに、皆でおいしいものを食べに行く。

播磨陰陽師には、二つの決まりごとがある。一つは、宗教をつくってはいけないという決まりで、人を導いたり教えたりせず、ただ、聞かれたことに答えればよい。宗教を作って他人をコントロールするよりも、まず自分をコントロールする方に忙しい。もう一つの決まりは、悪いことをしてはならないというものである。

また、助けるかどうかだが、ほとんど助けることはない。掟として、自業自得で苦しんでいる人など、助けてはならないものは絶対に助けてはならないとされている。頼まれて、そして覚悟がないと助けられないので、命を懸けて助けても良いと思ったときだけ助けるというのが基本である。しかしそういう場面は滅多にないから、基本は、助けない。

仕事としては、御神木の祟り系統のお祓いが一番多い。命懸けになることがあり、たいがいほどの祟りも3人死んだら終わるので、2人死んでから、3人目を助けるようにしている。木は何千年も生きる生命なので、人間でいうと、地球に生えている毛にあたる。下に気が流れていて、それが表された状態なので、地球自体が癒やしてくれるという現象である。御神木の祟りが大変なのは、自然の中の、人間の魂を浄化するシステムの中で起きる祟りだからである。環境破壊は、人間も自然の一部なので、自然を壊せばもちろん人間も壊れる。(飯塚・佐藤・中川 2019年)

#### 4. 播磨陰陽師の語りの特徴的なところ3点

播磨陰陽師の尾畑氏の話は、大変興味深い。また、「軍師」として、「結果がすべて」という中で日々練られてきた知恵や **practice** が詰まっているように思われる。その中でも、注目に値するのは、次の三点だ。

##### (1) 集合的無意識の意識的利用

- (2) 宗教を作らない（助けない）、頑張らない、光と影を作らない
- (3) 現代性（環境問題、ビッグデータを駆使するインターネット社会への示唆）

これらを、一つずつ見ていこう。また、リーダーシップ養成教育や現代の経営学・組織について考えていくうえでの示唆についても述べていく。

#### (1) 集合的無意識の意識的利用

尾畑氏の話の大部分は、集合的無意識が存在するという事、そしてそれが、播磨陰陽師の家系から選ばれ訓練を受けて非常に高度な技術を獲得した人にとっては、ある程度は操作可能であるということが前提になっている。そして、戦いで勝つか負けるかの結果が問われる軍師として、いかに集合的無意識を活用するのかが、腕の見せ所となっている。

- 播磨陰陽師がモニタリングするのは、個個人の心理ではなく集合的無意識である。その情報へのアクセスのために、尾畑氏は夢を使う。繰り返される夢や、複数の人が見る夢が、集合的無意識への重要な手掛かりになる。

→夢の解釈は、心理臨床で、例えばユング心理学の臨床家などによって使われている高度な技術である。一般人であるビジネスリーダーが夢解釈をするのは難しいかもしれない。しかし、リーダーは、自分の属している集団の集合的無意識の状態について、意識的に注意し、注意深い観察をして、モニタリングしようとする姿勢は持てるであろう。

- 播磨陰陽師は、集合的無意識に対して働きかけを行う。そのためには、生まれついで能力に加えて、様々な訓練がほどこされる。訓練では祝詞（音、バイブレーション）、武術（身体）、霊術（夢など）を収める。

→「元気な挨拶」ということを社会人になると叩き込まれた人も多いのではないか。声を出してする挨拶は、祝詞ではないが言霊の一つである。そう考えると、元気な挨拶を意識的に行うことは、理にかなっているのかもしれない。

- 播磨陰陽師は、集団心理につながりつつも、それを操作するために、自分の意識が飲み込まれないような手立てを必要とする。そのために、身体を整えることが重要になり、古武道によってそれを行っている。

→身体を鍛えることで、意識に対してのコントロールを加えるということが言われて

いる。これはリーダーにとっては、身体の調子をよくしておくことの重要性につながる。たとえ、部下がネガティブになっても、その意識に飲み込まれずに、ポジティブな解釈を伝えたりすることができるようになるからである。

→近年リーダーシップ開発で、姿勢（パワーポーズ）が脳に影響を与えるという観点から注目されている（カディ 2016年）。古武道などの身体や型の重要性は、これらの最新の動きに通じる。

- 播磨陰陽師は、軍師であり、（リーダーの参謀として働くために）社会が進む方向をわかっていないといけない。人々の意識がどこに向かっているのかに、アンテナを張っていれば、やがて顕在化する事象の一步先取りをすることができる。そのために、時代の最先端を行く職業につくことが、一族の掟となっている。尾畑氏の場合は、それがシリコンバレーでゲームを作るということであった。

→集合的無意識と一口にいても、深さにもよるのだろうが、色々な集団の無意識があるのだろう。そう考えると、時代の最先端を行く職業に就き、その最先端集団の集合的無意識の中にアンテナを合わせていくという掟は、理にかなっているように思われる。これから起こることは、必ず意識化されてから顕在化するわけなので、先頭を走る集団のまだ事象が顕在化されていない意識とつながれば、そのアイデアをとりこみ、一步も二歩も先んじて動くことができる。また、時代の変化にある程度の影響を与える可能性も生じる。

- 知識や技術の伝承については、基本は一子相伝の隠された世界である。しかし、後継ぎがないときには、世に出て、人々が聞くことに答え、知識を様々な人の意識の中に埋め込む。そして、必要な時には、色々な人の知識が積み重なり、必要な知識を播磨陰陽師の伝承者へ伝える。

→人々の意識の中に埋め込むという技法は、チベット仏教の高僧が、幻の経典を夢の中で見て、それを書き出すのと似ている（ナムカイノルブ 2000年）。集合的無意識はまさにコンピューターの「クラウド」として機能する。

## （2）宗教を作らない（助けない）、頑張らない、光と影を作らない

- すべての自然は、それ自体はよいものとして扱い、しかし困った事態に対しては、それは、組み合わせの問題と考え、祓うことによって移動させ、組み合わせを変化させる。善悪をいれない。



→ビジネスリーダーは、「頑張る」「助ける」そして「光を浴びる」のが、あるべき姿であると、私たちは思い込んでいる。しかし、「光」を作ると、そこには必ず「影」ができる。例えば、リーダーが頑張りすぎると、そのグループの一部の人たちは、影の役目をおってしまい、才能を発揮しなくなるというようなことも起こってくる。そして、いつかは、影が光を飲み込む。リーダーの在り方として、「絶妙なバランス」のようなものがあって、光を浴びすぎない、助けすぎない、頑張りすぎないという姿があるのかもしれない。そしてそれが、結果的には、長生きするリーダー像なのかもしれない。

### (3) 現代性（環境問題、インターネット社会への示唆）

- 御神木の祟りの話に出てくるように、木は何千年も生きる生命であり、環境破壊は、人間も自然の一部なので、自然を壊せばもちろん人間も壊れる。

→環境の問題は、システム論で考えていくのだが、播磨陰陽師の説明でも、祟りは、循環する浄化システムが機能しなくなったためにおこると考えられている。

- 尾畑氏の選んだ職業が、シリコンバレーでのゲーム制作。

→現在の世界を支配しているともいわれるG A F A（Google, Amazon, Facebook, Apple）がシリコンバレーであり、新しい技術、文明、そして権力の勃興するところである。また、人工知能の発達も、人類の文明の転換点となるとも言われているが、ゲームというのは、人工知能とほぼ同じことをさせている（三宅 2016）。播磨陰陽師が、代々伝わる掟に従って、世界にとって一番影響力のある場所に行き、我々の今後を完全に変えるような人工知能を扱う業界に身を置いたということは、意味深い。

→先に、集合的無意識について述べたが、現在、集合的無意識は、ビッグデータにより「科学的に」人々の潜在的な願望や意識がリサーチできるようになっている。一人一人は、自分は個々人であり、自分なりの意見や志向性を持っていると思っているが、個々人のデータを大量に集めると、個人レベルでは気が付いていないような原則が見えてくる。現代の陰陽師に該当するのは、ビッグデータを扱うサイエンティストということになるのかもしれない。そして、播磨陰陽師が集合的無意識に操作を加えたように、現代のマーケティング会社は、集合的無意識への関与をしていると考えられよう。

## 5. マインドフルネスとの関連

播磨陰陽師の語る世界は、どうマインドフルネスと関連するのであろうか。二つの点が注目される。

まず、一つ目は、集合的無意識の意識的利用である。マインドフルネスを続けていくと、だんだん自分の感情や思考のパターンを観察することができるようになり、そして、やがては、自分の感情や思考がいろいろなものの影響を受けることに気がつくようになる。その気づきがあって初めて、集合無意識なものに飲み込まれる自分に気づいてみたり、それに対するささやかな抵抗を試みたり、ということが意識的にできるようになるのであろう。そういう意味では、マインドフルネスは、集合的無意識への気づきに至る道である。

しかし、現在のマインドフルネスのプラクティスでは、エビデンスベースドを強調するあまり、集合的無意識の話は、出てこない。証明できないからである。また、多くの人々は、陰陽師のような高度な技術を習得するには至らない。そうすると、集合的無意識は、非科学的と区分され、マインドフルネスの言説には出てこない。

それでは、集合的無意識を完全に無視しているのかというと、そうでもない。マインドフルネスの効用として、色々なアイデアが出やすくなるなど、集合的無意識につながっているからこそおこるような事象が、伝えられている。よって、集合的無意識は、あるだろうけど、語らないものとして、取り扱われているように思われる。

しかし、マインドフルネス瞑想によって、集合的無意識に対して、より「のみ込まれやすくなる」人もいる。集合的無意識には色々なものがあるので、それは危険なことでもある。播磨陰陽師という昔からの知恵や **practice** があり、「集合的無意識の存在を前提にした軍事戦略（組織戦略）が、日本には存在していた」という知識は、一つの注意喚起になるのではなるのかもしれない。

二つ目は、宗教を作らない（助けない）、頑張らない、光と影を作らない、という点である。この部分は、欧米から逆輸入されたマインドフルネスや、コンパッションとは大きく違うところである。

軍師である播磨陰陽師の世界は、非情である。基本的には助けないし、頑張らない。宗教を作ることができるのにもかかわらず、作らないのは、あくまでも自分の身の丈を守り、技術者に徹し、代々長続きさせるための、光と影を作らない知恵のようにも思われる。この二つ目の点に関しては、とても深い考察を要するように思える。冥頭の哲学（末木 2018 年）などの日本中世の伝統思想などと合わせて考えていく必要があるのだろう。

マインドフルネスやコンパッションは、色々な危険性をはらんでいる。「瞑想難民」と言われるように、マインドフルネスを頑張ってやりすぎて、調子がおかしくなる事例が数多く報告されだしている。そして、世界的には、2018 年から 2019 年にかけて「安全なマ

インドフルネス」を求める動きが活発化している。(飯塚 2018) それを考えると、この播磨陰陽師の態度は、少なくとも日本においては、安全に「(集合的) 無意識」に対峙するための「取り扱い説明」としての要素をはらんでいるようにも思われる。

## 6. まとめ 播磨陰陽師の現代的な意味

本稿では、現存する播磨陰陽師へのインタビューをもとに、その知恵と **practice** の特徴を (1) 集合的無意識の意識的利用、(2) 光と影を作らない (宗教を作らない、助けない、頑張らない)、(3) 現代性 (地球環境と、ビッグデータとクラウドを駆使するインターネット社会への示唆) の三点から論じた。また、流行しているマインドフルネスとの関連についての考察を行った。

播磨陰陽師という言葉からは、怪しそうで、古そうとの、印象を受ける。しかしながら、その話を聞いてみると、荒唐無稽という感はおきない。そうではなく、インターネットやビッグデータによって、私たちの集合的無意識が可視化され、クラウドを通じて共有化され、近縁の距離なくつながってコミュニティをつくりやすくなった時代だからこそ、また、マインドフルネスが流行り、地球環境問題が待ったなしの時代だからこそ、彼らの伝えてきた知恵や技法が、今後の日本人や人類の文明の進化を考えるうえで、参考になると思われる。そして、IoT の進化や環境の問題から、文明の転換期と言われるときに、一子相伝で伝えられてきた播磨陰陽師の知恵や **practice** が「世に出た」という偶然、ないしは集合的無意識の働きにも、大きな意味を感じざるをえない。

### 【参考文献】

飯塚まりほか (2018) 『進化するマインドフルネス～ウェルビーイングへと続く道』

創元社.

飯塚まり・佐藤豪・中川吉晴 (2019) 「播磨陰陽師のインタビューノート：個人、社会、地球環境まで含めたウェルビーイング考察の参考として」『日本トランスパーソナル心理学精神医学』 Vol. 18, No.1

稲田義行(2003) 『陰陽五行』 日本実業出版社.

尾畑雁多(2010) 『強運になる「陰陽師の言霊」』 マキノ出版.

カディ、エイミー (2016) 『パワーポーズが最高の自分を作る』 早川書房.

斎藤英喜 (2014) 『陰陽師たちの日本史』 角川出版.

末木文美士(2018) 『死者と菩薩の倫理学』 ぶねうま舎.

末木文美士(2019) 『いま日本から興す哲学』 ぶねうま舎.

高平鳴海 (2007) 『図解 陰陽師』 新紀元社.

武光誠 (2010) 『日本人なら知っておきたい陰陽道の知恵』 河出書房新社.

ノルブ、ナムカイ（2000）『夢の修行—チベット密教の叡智』 法蔵館.

播磨学研究所編(2006)『磨陰陽師紀行』 神戸新聞総合出版センター.

三宅陽一郎（2016）『人工知能の作り方 —「おもしろい」ゲーム AI はいかにして動くのか』 技術評論社.

山下克明（2010）『陰陽道の発見』 NHK出版.

#### 【謝辞】

本研究は、同志社大学ビジネス研究科オムロン基金プロジェクト「国連グローバルコンパクトジャパンネットワーク（GCJN）のアカデミックネットワーク構築と、日本・京都発の新しいグローバルリーダーシップ・経営戦略教育の国際的展開」の一部として行われた。ここに謝辞を表す。